

子どもも自身の力を信じて伸ばし、 育ちを共に体験する。 それが、保育者の使命、喜び。

子どもの発達を理解し、一人ひとりの個性を受けとめ、適切な保育環境をつくること。それが、子ども自身が「成長する力」を伸ばすと語った、本山先生。幼稚園教諭として幼児教育に携わり、三児の母として子育てを通して得た経験を活かし、家庭から集団保育の現場までを網羅する幅広い保育学を教えています。ゼミでは「生活環境と子どもの発達との関連性」を研究テーマとし、現代の子どもを取り巻く衣・食・住環境のあり方を追究。さらに、園の視点に立った保育実習指導を心掛け、保育者の協力を得て、実習を通して自ら成長していく学生の力を信じて伸ばしています。子どもの「育ち」を共に体験し、喜びを分かち合う——保育の意義を伝える本山先生のまなざしは、学生たちの未来、そして、その先にいる子どもたちへと優しく向けられています。



本山先生の 主要著作

- ・子どもと保護者への効果的な「声かけ・応答」 金芳堂（共著）2008年
- ・幼稚園実習・保育所実習のMind&Skill 学芸図書（共著）2008年
- ・保育実践を支える「健康」 福村出版（共著）2010年
- ・家庭支援論 学芸図書（共著）2012年
- ・保育原理—世界の保育者と共に— 学芸図書（共著）2013年

本山 ひふみ

福祉貢献学部
福祉貢献学科
子ども福祉専攻 准教授

【学歴】

1982年3月 日本女子大学 家政学部児童学科卒業
1984年3月 愛知教育大学大学院 教育学研究科修了(教育学修士)

【職歴】

1984年4月 名古屋市立第一幼稚園 教諭
1993年4月 名古屋市立常磐幼稚園 教諭
1999年4月 一宮女子短期大学 幼児教育学科 講師
2005年4月 鈴鹿短期大学 生活学科 助教授
2008年4月 愛知学泉大学 家政学部家政学科 准教授
2013年4月 愛知淑徳大学 福祉貢献学部福祉貢献学科 准教授

家庭生活を学問対象とする家政学の中で、自分が興味を持つ分野は、好きだった音楽や体操や朗読が活かせる「児童学」だと感じて、学科を選びました。児童学での勉強は、目先の保育技術より「児童観」を養うことの大切さを教えられました。それは、子どもには自ら伸びようとする力があること、それを信じて大人がふさわしい環境を作ることの大切さです。このことは今の研究でも基本的な考え方になっています。

修士課程の途中で指導教官から「大学の先生に育児休暇はないが公立学校の教員にはそれがあつ」と聞きました。まだ育児休業法のできる前で、女性の専門職として公務員の教諭・看護婦・保育(当時の名称)だけに育児休業が認められ始めていました。母乳育児を経験しなかった私は、これを聞いて、名古屋市立幼稚園の教員として就職しました。当時、幼稚園の教員は短大卒が圧倒的多数でしたから、新卒の私と同じ年の人は経験5年目の先輩です。幼児向けの教材に疎く、知らないことばかりの私は見よう見まねで吸収しました。やはりある程度の教材学習は必要であると感じ、それは今の授業構成にもつながっています。

その後、縁あって短大の保育者養成に転職し、様々な科目を受け持ってきたので「専門は何ですか」と聞かれると、大まかに「保育学です」と答えています。保育学は、家庭育児から集団保育の場での教育までも含む幅広い意味合いです。勤務していた幼稚

園での子どもたちの喜びや意欲、戸惑いや悩みなどは、子どもを持つ本質的な特性で、時代の変化にあまり影響されないものです。今では親になっている年代の教え子たちの、印象的な保育の「コマ」が、今でも私にたくさんを教えてくれています。また、時代と共に移り変わる子どもたちの生活の様子は、保育者養成に移ってからの実習巡回や公開保育で訪れる園で感じ取っています。自分の子どもたちがお世話になった保育園や学童保育で垣間見た他の家庭の様子が貴重なものでした。最近では孫を通して家庭生活や園での様子も見聞きするようになりました。

これまでの経験を総括する形で、現在、フリーペーパーに毎月1回、乳幼児の生活に関する記事を連載しています。家庭の環境を整えることで、乳幼児が本来持っている、伸びようとする力を発揮できるように大人の関わりを、伝えたいと思っています。その際、編集者の解釈が私の意図と違っていたり、イラストレーターに正しい状況が伝わらなかつたりします。保育に関係のない人が読んでほイメージできるような文章表現を工夫する必要を痛感しています。

また一方、東海市幼児教育研究協議会での指導も続けています。保育者と保護者が同じ方向性を持って子どもを伸ばしていくために、保育者からの情報発信がとても重要だと考えており、それができる保育者の養成が、福祉に貢献する人材の育成だと思っています。